

結末部分の定型化からみる東西漫才

日 高 水 穂

1. はじめに

筆者はこれまで、東西漫才を談話展開（日高水穂 2018）、演者の役割関係（日高水穂 2019）、対相手／対聴衆の発話方向（日高水穂 2020）の観点から比較してきた。

これまでも述べてきたように、漫才は以下のように段階的に、話芸としての型を確立してきた（日高水穂 2017a・2017b 参照）。

〈黎明期〉明治末期～昭和初頭：門付け芸の万歳から諸芸融合の万才の発生

〈創生期〉1930～1950年代：ことばの掛け合い芸としての漫才の成立

〈完成期〉1960～1970年代：ボケ・ツッコミの掛け合いの型の確立

〈発展期〉1980年代以降：ボケ・ツッコミの掛け合いの多様化

〈創生期〉には、会話だけで演じられるいわゆる「しゃべくり漫才」が成立したが、この時期の漫才は、先行諸芸の影響を多分に引き継ぐものであった。すなわち、上方漫才は「笑いを生み出すための役割の比重が、賢役・愚役のいずれにも片寄っておらず、掛け合いが双方向的なものであるところに特徴がある」が、これは「軽口の「フリ（賢役）→ボケ（愚役）→ツッコミ（賢役）」を掛け合いの型として引き継いでいる」ことによる。それに対し、「東京漫才には、強烈な個性をもった愚役が一方向的に繰り出すフリとボケに、常識人の賢役が合いの手を入れる（あるいは翻弄されながらツッコミを入れる）」という一方向的な掛け合いが多くみられるが、これは落語との連続性によって生じた」ものである（日高 2018）。

こうした上方漫才にみられる双方向的談話展開と東京漫才にみられる一方向的談話展開の掛け合いの型は、〈完成期〉の東西漫才に継承され（日高 2019）、〈発展期〉の序盤にあたるマンザイブーム期においても、東西漫才の特徴として維持されている（日高 2020）。

一方、現在私たちが抱く「典型的な漫才」——センターマイクを挟んで、ボケ（愚

役)とツッコミ(賢役)が、ことばの掛け合いをする——のイメージは、漫才が先行諸芸から独立して独自の演芸形態を確立した〈完成期〉の演じ方をベースにしている。こうした「典型的な漫才」の確立、すなわち漫才の演じ方の定型化という観点から、日高(2019)では、以下の指摘をした。

1960～1970年代は、愚役を「ボケ」、賢役を「ツッコミ」と称するのが定着した時期であり、漫才の演じ方が定型化していく時期でもある。定型化の一例として、漫才の結末に現れる締めめの定型句をあけておこう。「僕は幽霊」と「交通巡査」は、奇しくもともに、賢役の発する「そんな、あほな」で終わっているが、それはこのフレーズが上方漫才の締めめの定型句となっていることを意味する。「おとぼけ名舞台」の「何をやっとなだ」、「温泉案内」の「いい加減にしろ」も、汎用的な締めめの定型句として機能し得るものである。

〈創生期〉の漫才は、愚役によるオチの一言で終わるものが一定数存在するが、〈完成期〉の漫才は、愚役のボケに賢役のツッコミを添えるという掛け合いの型が定型化したことにより、賢役の締めめの定型句も必須となってきたものと考えられる。この定型化の流れは、1980年代以降の〈発展期〉においてさらに顕著になる。

日高(2019)は、〈完成期〉の漫才談話を中心に分析を行ったため、上記の指摘は〈創生期〉と〈発展期〉の漫才談話については、具体例を挙げて分析を行ったものではない。本稿では、漫才談話の〈主要部〉(日高2018)の結末部分に着目し、〈創生期〉から〈発展期〉序盤のマンザイブーム期までの東西漫才コンビの演目を複数例みることにより、上記の指摘を検証していく。

2. 分析の方法

本稿では、日高(2018・2019・2020)で分析した以下の東西漫才コンビの演目について、〈主要部〉の結末部分の談話展開を観察し、特にオチへの応答のフレーズの定型性についてみていく。演目の選定にあたっては、音声資料によって実際に演じられたことが確認できるものを中心としたが、音声資料が十分に残っていないコンビについては、台本資料で補った。また同じ演目であってもセリフが一部異なるもの(収録時期の異なる別の音声資料を含む)は別資料として扱う(表1の「分析

演目数」は正確には「分析資料数」である)。分析資料の詳細は稿末にまとめて示す。

表1 東西漫才の分析資料

時期	漫才コンビ		分析演目数	資料番号
創生期	上方	横山エンタツ・花菱アチャコ	11	資料1
		芦乃家雁玉・林田十郎	9	資料2
	東京	リーガル千太・万吉	14	資料3
		内海突破・並木一路	4	資料4
完成期	上方	中田ダイマル・ラケット	17	資料5
		夢路いとし・喜味こいし	24	資料6
	東京	コロムビアトップ・ライト	3	資料7
		獅子てんや・瀬戸わんや	7	資料8
マンザイ ブーム期	上方	横山やすし・西川きよし	9	資料9
		島田紳助・松本竜介	9	資料10
	東京	ツービート	3	資料11
		星セント・ルイス	4	資料12

〈主要部〉の結末部分は、オチで終わるものとオチへの応答（最終ボケへの応答）で終わるものが基本である。ボケへの応答の定型句については、日高（2017a）で、上方漫才の代表的な形式として「あほ類」「むちゃ類」「ええかげん類」「頼りない類」「よう言わんわ」「なんでやねん」を取り上げ、その使用状況の変遷をみた。オチへの応答のうち汎用性のあるフレーズは、ボケへの応答の定型句と重なると考えられるため、本稿でもこれらの類別を参照しながら形式を整理していく。なお、本稿では東西漫才を比較するため、東西漫才の両方に現れる表現の代表形は標準語形で示すことにする。すなわち、「ええかげん類」（上方では「ええかげんにせえ」、東京では「いいかげんにしろ」）は「いいかげん類」とし、「もうええわ」（上方）と「もういいよ」（東京）は「もういい類」とする。

以下では、結末部分の定型化が進む前段階である〈創生期〉については、結末部分の談話展開の具体例をあげる。その際、以下の下線・太字によって「おかしみの表現」に関わる発話機能を示す。

_____ おかしみの発話を引き出す発話（フリ）

太字 おかしみの発話（ボケ）

_____ おかしみの発話に対する反応（ツッコミ）

3. 〈創生期〉の漫才談話の結末部分

3.1 横山エンタツ・花菱アチャコ

まず、〈創生期〉の上方漫才コンビ、横山エンタツ・花菱アチャコの「早慶戦」の結末部分をみしてみる。

(1) 横山エンタツ・花菱アチャコ「早慶戦」（資料 1-01）

エンタツ：とうとう、勝ちましたね。

アチャコ：ああ、勝ったなァ。

エンタツ：おもしろかったなァ。

アチャコ：ああ、どっちが勝ったんや？

エンタツ：はあ、ありがとう、もうとっても愉快でねえ。

アチャコ：愉快やあれへんが、どっちが勝ったんや。

エンタツ：いやもう、そんなこと放つといてねえ。

アチャコ：そんなこと放つといてねえ、九対八のアルファ付きでどっちが勝ったんやね。

エンタツ：そりゃ君、九が勝ちやないか。

上記は、SP レコードに収録された「早慶戦」の結末部分であるが、横山エンタツ編（1946）に収録された「早慶戦」にはこの続きがあり、以下のような展開になっている（表記は現代仮名遣いに変更）。

(2) 横山エンタツ・花菱アチャコ「早慶戦」（資料 1-11）

アチャコ：君は何でも作戦や。これで二者ホームインして、九対八アルファ付きや。

エンタツ：面白かったな。到頭勝ちましたね。

アチャコ：勝ったって、どっちが勝ったんや？

エンタツ：はあ有難う。愉快でした。

アチャコ：そんなことと違う。どっちが勝ったかと聞いてるんや？

エンタツ：さあ。……

アチャコ：さあって、君、見てたんやろう。

エンタツ：すっかり見てました。

アチャコ：それで、どっちが勝ったか分らんか？

エンタツ：スコアーは何ぼでしたいな？

アチャコ：九対八やないか。

エンタツ：ああ、そんなら九の方が勝ちや。

アチャコ：九の方の学校は？

エンタツ：ちょっとお待ち下さいよ。エエッと、早稲田、違いますかいな。そんなら慶応これも違いますかいな。もう、ちょっとのどこや。そんなら——明治！

アチャコ：明治？！ 早慶戦に何で明治が出るんや？

エンタツ：作戦！！

「作戦！！」は、この演目の中でエンタツが繰り返すフレーズであり、(2) のアチャコの冒頭発話「君は何でも作戦や。」の直前にも現れている。これが伏線となって、最終発話の「作戦！！」がオチとして機能するものになっているのである。

収録時間に制限のある SP レコードでは、「九対八のアルファ付きなら九の勝ち」というボケの部分をおチとして終了しているが、(1) (2) のいずれも、オチの一言が締めめの最終発話となっている点では共通している。

このコンビによる 11 演目のうち、オチで終わるものは 4 演目、オチへの応答で終わるものは 7 演目であった。この 7 演目のオチへの応答のフレーズは、すべてツッコミ役のアチャコが発している。それらを汎用性のあるフレーズと演目固有のフレーズに分けて示すと、以下のようになる。

(3) 横山エンタツ・花菱アチャコの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

あほ類：あほやな。(資料 1-02)

(b) 演目固有のフレーズ

キュウセイ軍？(資料 1-03)

けったいなこと言う男やな。(資料 1-04)

何や愛人の卵みたいに言うてんな。(資料 1-06)

そうや。おいおい、失敬な物の言い方すな。(資料 1-08)

ああ、そうか。(資料 1-09)

えー？(資料 1-10)

汎用性のあるフレーズとして「あほ類」の使用もみられるが頻用されているわけではなく、演目固有のフレーズが多い。定型的な締めフレーズによってネタを終えるという演じ方ではなかったことがわかる。

3.2 芦乃家雁玉・林田十郎

次に〈創生期〉の上方漫才コンビ、芦乃家雁玉・林田十郎の「もとは役者」の結末部分をみてみる。

(4) 芦乃家雁玉・林田十郎「もとは役者」(資料 2-01)

十郎：「息絶えて、いつもながらの人柱。雉も鳴かずば撃たれはすまい。無益な殺生ッ」

雁玉：「そらごといわずにィ」

十郎：「ヨッ、ハッ」

雁玉：「終りおろうッ。ウッハッフア」

十郎：うまいなァ。

雁玉：うまいはずや。もと役者やがな。

二人：きれいなというほどでもないがね。

「きれいなというほどでもないがね。」は、独特の節回しで発せられ、この演目で十郎が繰り返すフレーズである。役者出身の十郎が、漫才師にしては容姿端麗であることを逆手に取った、このコンビの定番ギャグとも言えるフレーズである。演目の終盤において芝居の真似事をいかにも上手く演じて「もと役者やがな」を引き出し、二人が声をそろえてこのフレーズを発するというオチで終わっている。

次の例は、謎かけで終わる演目である。

(5) 芦乃家雁玉・林田十郎「宴会戻り」(資料 2-09)

雁玉：今までやりました、漫才とかけて、あげましょう、もらいますと貧乏人のお百姓さん。

十郎：その心は？

雁玉：声／肥（コエ）がとらんで（通らんで）出来が悪いと言う。

十郎：お粗末さま。

ボケ役の雁玉が発する謎かけの答えがオチとなり、ツッコミ役の十郎の「お粗末さま」で終わっている。これもオチへの応答とみなすとなると、このコンビによる9演目のうち、オチで終わるものは6演目、オチへの応答で終わるものは3演目となる。この3演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(6) 芦乃家雁玉・林田十郎の演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

お粗末類：お粗末さま。(資料 2-09)

(b) 演目固有のフレーズ

けったいな仕返しやな。(資料 2-07)

運不運というものはあるもんでんな。(資料 2-08)

「お粗末さま」は謎かけの答えへの応答なので、汎用性はあるが漫才談話特有の定型句とは言いがたい。全体的にはオチで終わるものが多く、定型的な締めフレーズが確立する前の演じ方を踏襲していることがわかる。

3.3 リーガル千太・万吉

次に〈創生期〉の東京漫才コンビ、リーガル千太・万吉の「無学者」の結末部分をみってみる。

(7) リーガル千太・万吉「無学者」(資料 3-01)

千太：時に祝いもの都合があるんですがねエ。男の子ですか、女の子ですか？

万吉：サアサア、それだよ、心配しているのは。

千太：どうかしたんですか。

万吉：アー、「だから男のようなところもあれば、また女のようなところもあるよ」と。

千太：冗談言っちゃいけませんよ、あんた。

この演目の結末部分は、万吉がボケ、千太がツッコミの役を担い、千太の「冗談言っ

ちゃいけませんよ」という汎用性のあるツッコミフレーズで終わっているが、他の演目では千太がボケ役、万吉がツッコミ役を担うことが多い。その際、「オチーオチへの応答」で終わらず、二人で笑い合うという終わり方がみられる。

(8) リーガル千太・万吉「世界漫遊」(資料 3-10)

万吉：しかし随分君も各地を漫遊したねえ。

千太：もう至るところ行ってきたがねえ。

万吉：うん。

千太：それからそうそう、僕は日本へ行ってきたよ。

万吉：何を言ってるんだよ、君は日本人じゃないか。

千太：あそうかあ。

二人：ハハハハハハハ。

こうした終わり方は「智恵くらべ」(資料 3-02)にもみられるが、これらをオチへの応答で終わるものに含めて集計すると、このコンビによる 14 演目のうち、オチで終わるものは 4 演目、オチへの応答で終わるものは 10 演目であった。この 10 演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(9) リーガル千太・万吉の演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

冗談類：冗談言っちゃいけませんよ、あんた。(資料 3-01) / 冗談言うなよ、おい。(資料 3-11) / 冗談言うなよ。(資料 3-12)

(b) 演目固有のフレーズ

えっ、違うって言うんだろう。(資料 3-02)

うわあんてへへへえ。(資料 3-04)

あたりまえだよ君、素面でこれじゃあ色きちがいだよ。(資料 3-06)

そりゃ、音丸の、君、満州吹雪だよ。(資料 3-07)

おいおい息の止まったやつが喋れるかい。(資料 3-08)

とほほ。(資料 3-09)

何を言ってるんだよ、君は日本人じゃないか。(資料 3-10)

定型的な締めフレーズとして「冗談類」を使用しているが、これは上方漫才の

ボケへの応答にはみられない（日高 2017a 参照）。「冗談類」は東京（江戸）落語で多用されるフレーズであることから、このコンビ（ともに落語家出身）が落語の影響を強く受けていることがうかがえる。ただ、オチで終わる演目や演目固有のフレーズで終わる演目のほうが多く、定型的な締めフレーズを多用する段階にはないと言える。

3.4 内海突破・並木一路

〈創生期〉の東京漫才コンビ、内海突破・並木一路の「ボクの俳句」の結末部分をみしてみる。

(10) 内海突破・並木一路「ボクの俳句」（資料 4-01）

突破：秋の海。

一路：秋の海。

突破：ひねもすのたりのたりかな。これはですね、秋の海辺に私が立っており
ましたら、どこからともなく一羽のひねもすが飛んできて、波の上をお
もむるのにたりしちゃったんです。そのときののたり気分が非常によ
かったから、ひねもす君がもう一度のたっちゃったんです。で、2度の
たったので、「のたりのたり」で、おしまいの「かな」はサービスですが。

一路：何がサービスだよ。

（中略）

突破：俳句もここいらが最高ですね。

一路：何が最高だよ。

横山エンタツ編（1946）に収録された「俳句問答」（資料 4-03）も同じ内容の演目であるが、最終発話はオチへの応答の「判ったよ」である。このフレーズは、「吾は海の子」（資料 4-04）でも使用されており、オチへの応答として汎用性のあるフレーズとなっている。

横山エンタツ編（1946）に収録された「青春悩み多し」（資料 4-02）は、以下のような終わり方をしている（Aは突破、Bは一路が演じたものと思われるが原文のままとする）。

(11) 内海突破・並木一路「青春悩み多し」（資料 4-02）

A：上の妹が面長で山田五十鈴型。

B：たまらないね。

A：下の妹が丸顔で高峰秀子型。

B：紹介しろ。

A：で兄貴の僕が――

B：誰型だい？

A：長谷川一夫型。

B：エーッ？

A：こら一寸云い過ぎたかな。

B：いや僕の方が聞き過ぎたよ。

「云い過ぎた」に対する「聞き過ぎた」なので、最終発話はオチとして機能して
いと言えるが、ここではオチへの応答として扱うことにする。以上により、この
コンビによる4演目は、いずれもオチへの応答で終わるものとみなせる。

(12) 内海突破・並木一路の演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

了解類：判ったよ。(資料4-03・04)

(b) 演目固有のフレーズ

何が最高だよ。(資料4-01)

いや僕の方が聞き過ぎたよ。(資料4-02)

「了解類」の「判ったよ」は、「もう判ったから終わり」というような意味合いで
締めめのフレーズとして機能するものと思われるが、同じ演目でもSPレコード収録
の「ボクの俳句」は演目固有のフレーズで終わっているところからすると、定型的
な締めめのフレーズとして確立していたとは言えないだろう。

4. 〈完成期〉の漫才談話の結末部分

4.1 中田ダイマル・ラケット

〈完成期〉の上方漫才コンビ、中田ダイマル・ラケットによる17演目は、すべてオ
チへの応答で終わっていた。分類して示すと以下のようになる。

(13) 中田ダイマル・ラケットの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

もういい類：もうええわ。(資料 5-10・12・15・16・17) ／もうええわ、あほう。

(資料 5-06)

あほ類：そんな、あほな。(資料 5-05・07・08・09・11)

あかん類：こらあかんわ。(資料 5-04)

いいかげん類：ええかげんにせいよ、ほんま。(資料 5-14)

何類（何や）：何や、そら。(資料 5-01)

(b) 演目固有のフレーズ

そんなのあるかい。(資料 5-02)

ええやないわ。これ以上ほっといたらしまいには何を言い出すやわからん。

(資料 5-03)

無線が違うわ。(資料 5-13)

汎用性のあるフレーズが多く、その中でも「もういい類」と「あほ類」が多用されている。定型的な締めフレーズによってネタを終えるという演じ方が、このコンビにおいては確立していたことがわかる。

4.2 夢路いとし・喜味こいし

〈完成期〉の上方漫才コンビ、夢路いとし・喜味こいしによる 24 演目のうち、オチで終わるものは 11 演目、オチへの応答で終わるものは 13 演目であった。この 13 演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(14) 夢路いとし・喜味こいしの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

あほ類：そんな、あほな。(資料 6-01・05・06) ／あほな。(資料 6-03) ／あほなこと、言うな。(資料 6-09) ／あほかい。(資料 6-13)

もういい類：もうええ。(資料 6-14) ／もうええわ。(資料 6-17)

あかん類：あかん。(資料 6-02)

何類（何や）：何や。(資料 6-08)

(b) 演目固有のフレーズ

おい。(資料 6-10)

帰ろう。(資料 6-12)

あべこべや。(資料 6-15)

汎用性のあるフレーズの中では「あほ類」と「もういい類」が多用されており、ダイマル・ラケットとともに、このコンビが上方漫才の定型的な締めフレーズの確立に影響を及ぼしたことがうかがえる。

4.3 コロムビアトップ・ライト

〈完成期〉の東京漫才コンビ、コロムビアトップ・ライトによる3演目のうち、オチで終わるものは1演目、オチへの応答で終わるものは2演目であった。この2演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(15) コロムビアトップ・ライトの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

何類(何やっている・何言っている):何をやっとなだ。(資料 7-01) / 何を言うておる。(資料 7-02)

(b) 演目固有のフレーズ

なし

「何を言うておる」は、リーガル千太・万吉の「世界漫遊」(資料 3-10)のオチへの応答のセリフ「何を言ってるんだよ、君は日本人じゃないか」にもみられる。上方漫才でもボケへの応答として「何を言うてんのやな」(横山エンタツ・花菱アチャコ「早慶戦」(資料 1-01))が使用されてはいるが、オチ(最終ボケ)への応答には現れていない。オチへの応答のフレーズとして定型化した表現には、東西差があったようである。

4.4 獅子てんや・瀬戸わんや

〈完成期〉の東京漫才コンビ、獅子てんや・瀬戸わんやによる7演目をみると、あいさつ(「どうも失礼しました」、「ありがとうございます」)で終わるものが3演目(資料 8-01・02・04)あった。あいさつは漫才談話の〈終了部〉(日高 2018 参照)に現れる要素で、漫才談話の終了の目印にはなるが、演目自体の終結部分とは見な

せない。これらの3演目は、あいさつ部分を除くといずれもオチへの応答で終わっている。これらをオチへの応答で終わるものに含めて集計すると、オチで終わるものは1演目、オチへの応答で終わるものは6演目となる。この6演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(16) 獅子てんや・瀬戸わんやの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

いいかげん類：いいかげんにしろ。ほんとにもう。(資料8-01)

冗談類：冗談じゃないよ。(資料8-02)

何類（何言っている）：何言ってた、もう。(資料8-05)

ばか類：ばかな。(資料8-06)

(b) 演目固有のフレーズ

わっ。(資料8-04)

いやー。(資料8-07)

「いいかげん類」は、中田ダイマル・ラケットにも使用がみられた。おそらく上方漫才で頻用されるフレーズを東京漫才に取り入れたものだろう。一方、「冗談類」は東京漫才らしいフレーズである。また、コロムビアトップ・ライトの演目で使用されていた「何言ってた」がここにも現れていることから、東京漫才ではこのフレーズが締めめの定型句として定着していたことが確認できる。

なお、このコンビは、対聴衆発話の割合が高いところに特徴があるが（日高2020）、それが聴衆へのあいさつで終わるという演じ方につながっていると言える。「オチーオチへの応答ーあいさつ」という流れは、漫才談話の定型化の一類であるとみてよいだろう。

5. マンザイブーム期の漫才談話の結末部分

5.1 横山やすし・西川きよし

マンザイブーム期の上方漫才コンビ、横山やすし・西川きよしの9演目のうち、1演目はやすしのオチのセリフにきよしが絶句し、一呼吸置いたあとで「ありがとうございました」とあいさつで終わっている（資料9-07）。また1演目はきよしがやすしの後頭部を叩く（どつく）という発話を伴わないツッコミで終わっている（資

料 9-04)。これらの「絶句」や「どつき」もオチへの応答として汎用性のあるものと言えるだろう。残り 7 演目は、発話を伴うオチへの応答で終わっている。

(17) 横山やすし・西川きよしの演目のオチへの応答（発話を伴うもの）

(a) 汎用性のあるフレーズ

やめさせてもらう類：やめさせてもらうわ。（資料 9-01・02・03・08）

いいかげん類：ええかげんにせえ。（資料 9-05）／ええかげんにせえや。（資料 9-09）

あほ類：あほなことを言うな。（資料 9-06）

(b) 演目固有のフレーズ

なし

このコンビは、ボケ役とツッコミ役が同じ演目内でも頻繁に入れ替わり、オチのセリフもやすしが言う場合もあれば、きよしが言う場合もある。上記のオチへの応答のフレーズのうち、「やめさせてもらう類」はすべてきよしが使用しており、「いいかげん類」と「あほ類」はやすしが使用していた。縦横無尽な掛け合いは、こうした定型的なフレーズによって締められ、型として完成していたと言える。

5.2 島田紳助・松本竜介

マンザイブーム期の上方漫才コンビ、島田紳助・松本竜介の 9 演目は、オチで終わるものが 4 演目、オチへの応答で終わるものが 5 演目であった。この 5 演目のオチへの応答のフレーズは、以下のようなものである。

(18) 島田紳助・松本竜介の演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

もういい類：もうええわ。（資料 10-02・04・06・07・08）

(b) 演目固有のフレーズ

なし

このコンビの演目は、ボケ役の紳助が早口でオチのあるエピソードをしゃべりまくり、ツッコミ役の竜介が合いの手を入れる展開が多く、紳助のオチのセリフで終わるものが一定数みられる。一方、竜介によるオチへの応答は「もうええわ」に固

定されており、このフレーズが締めめの定型句として定着していたことがわかる。

5.3 ツービート

マンザイブーム期の東京漫才コンビ、ツービートの3演目は、いずれもオチへの応答で終わっている。

(19) ツービートの演目のオチへの応答

(a) 汎用性のあるフレーズ

いいかげん類：いいかげんにしろよ。

もういい類：もういいわ。

(b) 演目固有のフレーズ

おまえ、そればかりだろ。

このコンビは、ボケ役のたけしが早口の毒舌でしゃべりまくって、ツッコミ役のきよしが合いの手を入れるというスタイルを取るが、締めめの一言はきよしによるツッコミフレーズとなっている。「いいかげん類」や「もういい類」など、上方漫才で頻用されるフレーズが取り入れられている。

5.4 星セント・ルイス

マンザイブーム期の東京漫才コンビ、星セント・ルイスの4演目の最終発話は、以下のようなものである。いずれもセントが発している。

(20) 星セント・ルイスの演目の最終発話

- 1) ここに少年がいます。ボーイにE Rをつけます。ボーヤー。セント・ルイスでした。(資料 12-01)
- 2) 僕が言ったのは、100 メートル、7 秒も走ったらふらっとするっっちゃうの。セント・ルイスでした。(資料 12-02)
- 3) 冗談ぶっこいてる場合じゃない、こっちへ回せ、こっち。早く回せ、早く。どういことや、おまえ。どうもありがとうございました。(資料 12-03)
- 4) 明日に向かって、理想の言葉、普段、理想と思ってる言葉、きわめてくだらないことで、こいつの理想ってのは。飲みたい、もてたい、家建てたい、人が見てなけりゃさぼりたい！(資料 12-04)

上記のセントの最終発話の太字部分をオチとみるとすると、いずれも演目自体はオチのセリフで終わっていることになる。ただし、1)・2) では「セント・ルイスでした」、3) では「どうもありがとうございました」というあいさつが付されており、「オチーあいさつ」という終わり方が定型化したものとなっていることがわかる。このコンビは、獅子てんや・瀬戸わんやの弟子であり、師匠と同様に対聴衆発話の割合が高い（日高 2020）。聴衆へのあいさつで終わる締め方は、師匠から継承したものであろう。

6. まとめ

以上をまとめると表 2 のようになる。

表 2 東西漫才の結末部分

（あいさつは内数）

時期	漫才コンビ		オチ	オチへの応答		あいさつ
				汎用	演目固有	
創生期	上方	横山エンタツ・花菱アチャコ	4	1	6	－
		芦乃家雁玉・林田十郎	6	1	2	－
	東京	リーガル千太・万吉	4	3	7	－
		内海突破・並木一路	－	2	2	－
完成期	上方	中田ダイマル・ラケット	－	14	3	－
		夢路いとし・喜味こいし	11	10	3	－
	東京	コロムビアトップ・ライト	1	2	－	－
		獅子てんや・瀬戸わんや	1	6	－	3
マンザイブーム期	上方	横山やすし・西川きよし	－	9	－	1
		島田紳助・松本竜介	4	5	－	－
	東京	ツービート	0	2	1	－
		星セント・ルイス	4	－	－	3

〈創生期〉にはオチで終わるものが一定数あるが、オチの一言で終わる話芸と言えば落語であろう。〈創生期〉はまだ、漫才が落語などの先行諸芸から分岐する途上にあったことがうかがえる。一方、この時期にはすでにオチへの応答で終わるも

のもみられるが、これはボケとツッコミの応酬という漫才ならではの掛け合い型から生み出されたものと言える。〈完成期〉から〈発展期〉にかけては、このオチへの応答のフレーズが、汎用性のある定型句に集約されるようになる。本稿でみてきた東西漫才のオチへの応答の定型句を表3にまとめる。

表3 東西漫才のオチへの応答の定型句

漫才コンビ		類別
上 方	エンタツ・アチャコ	あほ類
	雁玉・十郎	お粗末類
	ダイマル・ラケット	あほ類・あかん類・もういい類・いいかげん類・何類
	いとし・こいし	あほ類・あかん類・もういい類・何類
	やすし・きよし	あほ類・いいかげん類（やすし）／やめさせてもらう類（きよし）
	紳助・竜介	もういい類
東 京	千太・万吉	冗談類
	突破・一路	了解類
	トップ・ライト	何類
	てんや・わんや	冗談類・ばか類・何類・いいかげん類
	ツービート	もういい類・いいかげん類
	セント・ルイス	（あいさつ）

上方漫才では「あほ類」「あかん類」「やめさせてもらう類」、東京漫才では「冗談類」「ばか類」が地域固有の表現となっている。「もういい類」「いいかげん類」はいずれにもみられるが、おそらく上方漫才で多用されていたものが東京漫才に取り入れられたものだろう。

〈完成期〉では1つのコンビが複数の定型句を使用しているが、〈発展期〉になると演者ごとに使用する定型句が固定する傾向がみられる。演目の内容によらず、オチへの応答のフレーズを1つに固定させていくのは、話芸としての漫才の定型化が進んだことによるだろう。

〈完成期〉に掛け合いの型を確立した漫才は、〈発展期〉に入り、その掛け合いの型を多様化させていくが、終結部分の定型化（形式化）は進んでいく。本稿では、〈発展期〉序盤のマンザイブーム期までの漫才コンビをみたが、その後の展開をみてい

くことが今後の課題となる。

付記 本研究の一部は、JSPS 科研費 16H01933、20H00015 によって行った。

引用文献

花王名人劇場編（1981）『漫才・マンザイ・MANZAI』講談社

西角井正大編（1996）『大衆芸能資料集成 8 舞台芸 I 俄・万作・神楽芝居』
三一書房

日高水穂（2017a）「漫才の賢愚二役の掛け合いの変容—ボケへの応答の定型句をめ
ぐって—」『国文学』101 関西大学国文学会

日高水穂（2017b）「漫才の賢愚二役の名称と役割の変容—「ツッコミ」「ボケ」が
定着するまで—」『近代大阪文化の多角的研究—文学・言語・映画・国際事情—』
関西大学なにわ大阪研究センター

日高水穂（2018）「談話展開からみた〈創生期〉の東西漫才」『国文学』102 関西
大学国文学会

日高水穂（2019）「役割関係からみた〈発展期〉の東西漫才」『国文学』103 関西
大学国文学会

日高水穂（2020）「発話方向からみたマンザイブーム期の東西漫才」『国文学』104
関西大学国文学会

横山エンタツ編（1946）『笑ひのプレゼント 漫才名作集』櫻書房

分析演目資料

資料1：横山エンタツ・花菱アチャコ

01「早慶戦」（CD『昭和の演芸1 漫才』）／02「僕の家庭」（CD『SP 盤復刻芸
能全集・漫才編』）／03「これは珍しい」・04「トンカツと又の進」・05「奈良見物」・
06「象の卵」・07「君は兵隊」・08「耳の耳」（LP レコード『上方お笑い七十年』）
／09「モグリの大将」・10「僕の家庭」・11「早慶戦」（横山エンタツ編 1946）

資料2：芦乃家雁玉・林田十郎

01「もとは役者」・02「競キリン」・03「お笑い骨董品」・04「珍野球」・05「琵琶
湖めぐり」・06「憎さ千倍」（LP レコード『上方お笑い七十年』）／07「質屋の娘」
（CD『SP 盤復刻芸能全集・漫才編』）／08「運不運」・09「宴会戻り」（CD『上
方漫才黄金時代1』）

資料3：リーガル千太・万吉

01「無学者」・02「智恵くらべ」・03「魚つり」・04「素人医者」・05「相談の相談」・06「酒を呑んだら」・07「浪曲学校」・08「花はいろいろ」・09「貯金迷案」・10「世界漫遊」(CD『昭和の爆笑王8 リーガル 千太・万吉』)／11「すてきな友情」(CD『SP 盤復刻芸能全集・漫才編』)／12「やきとり」(CD『東西お笑いベスト漫才4』)／13「切符制度」・14「朗らかな店員」(リーガル・レコード収録、西角井正大編 1996)

資料4：内海突破・並木一路

01「ボクの俳句」(CD『SP 盤復刻芸能全集・漫才編』)／02「青春悩み多し」・03「俳句問答」・04「吾は海の子」(横山エンタツ編 1946)

資料5：中田ダイマル・ラケット (*筆者による仮題)

01「僕の設計図」・02「僕の夢君の夢」(CD『上方漫才黄金時代6』)／03「僕の漂流記」・04「恋の手ほどき」・05「家庭混戦記」・06「僕の農園」(CD『栄光の上方漫才1』)／07「新憲法」・08「職場あれこれ」・09「僕は幽霊」・10「お笑い結婚式」(CD『栄光の上方漫才2』)／11「僕は迷優」(CD『爆笑漫才傑作選1』)／12「僕は小説家」・13「交通事故*」・14「南極探検隊*」・15「アフリカ猛獣狩り*」・16「僕の健康法」・17「僕の農園」(DVD『お笑いネットワーク発 漫才の殿堂 中田ダイマル・ラケット』)

資料6：夢路いとし・喜味こいし

01「交通巡査」(CD『お笑い百貨事典 昭和34年～39年・テレビコメディアー・ブーム』)／02「もしもし鈴木さん」・03「二十五年目の新婚旅行」・04「幽霊指南」・05「花嫁の父」・06「私は役者よ」・07「娘の縁談」・08「こいしさんこいしさんピアノ」・09「物売り・季節感」・10「仲人さん」・11「女の一生」・12「我が家の湾岸戦争」・13「あなたの代行引受けます」・14「ジンギスカン料理」・15「交通巡査」・16「機械に弱くてこまります」・17「地球にやさしい男」・18「ああ結婚記念日」・19「全国名物がいっぱい」・20「ポンポン講談」・21「レストランにて」・22「親子どんぶり」・23「ファーストフード初体験」・24「迷い犬探しています」(DVD『夢路いとし・喜味こいし漫才傑作選』)

資料7：コロムビアトップ・ライト

01「おとぼけ名舞台」(CD『爆笑! 東西傑作漫才集8』)／02「おとぼけ勧進帳」CD『お笑い百貨事典 昭和26年～33年・民放ラジオ局開局にのって』／03「おとぼけ国際放送」(LPレコード『東京漫才のすべて』)

資料 8：獅子てんや・瀬戸わんや

01「温泉案内」(CD『ラーフィン〜爆笑マンザイ特撰集 1』)／02「世相あれこれ」
(CD『昭和のお笑い名人芸 2』)／03「コインランドリー」(CD『昭和のお笑い
名人芸 4』)／04「なんで行ったの?」・05「酔っ払い」(CD『爆笑!東西傑作漫
才集 3』)／06「世界食べ歩き」(CD『爆笑!東西傑作漫才集 8』)／07「池田屋
騒動記」(CD『爆笑!東西傑作漫才集 10』)

資料 9：横山やすし・西川きよし

01 LP レコード『THE MANZAI part.3』収録演目 (1980.12.30 放送分)／02・
03 DVD『THE MANZAI LEGEND DVD-BOX』収録演目 (1980.4.1 放送分・
1981.6.30 放送分)／04・05・06・07・08 DVD『お笑いネットワーク発 漫才の
殿堂 横山やすし・西川きよし』収録演目 (1979.7.28 放送分・1980.1.12 放送分・
1981.10.3 放送分・1983.11.13 放送分・1984.11.24 放送分)／花王名人劇場編 1981
収録演目

資料 10：島田紳助・松本竜介

01・02・03 DVD『THE MANZAI LEGEND DVD-BOX』収録演目 (1980.4.1 放
送分・1980.7.1 放送分・1981.12.8 放送分)／04・05・06・07・08 DVD『お笑い
ネットワーク発 漫才の殿堂 島田紳助・松本竜介』収録演目 (1978.5.13 放送分・
1980.8.2 放送分・1981.1.1 放送分・1981.5.9 放送分・1983.1.29 放送分)／09 花王
名人劇場編 1981 収録演目

資料 11：ツービート

01 LP レコード『THE MANZAI part.1』収録演目 (1980.7.1 放送分)／02 LP
レコード『THE MANZAI part.2』収録演目 (放送日不明)／03 LP レコード『THE
MANZAI part.3』収録演目 (1980.12.30 放送分)

資料 12：星セント・ルイス

01 DVD『THE MANZAI LEGEND DVD-BOX』収録演目 (1980.10.7 放送分)
／02 CD『昭和達人芸大全 4』収録演目／03 DVD『昭和のお笑い名人芸』収録
演目／04 花王名人劇場編 1981 収録演目

(ひだか みずほ／本学教授)